立正大学心理学研究所紀要 第17号（2019） 1－16

# 男女関係における魅力と関係満足度[1)]

川 名 好 裕（立正大学心理学部教授）

# Attractiveness and Satisfaction in Male and Female Relationships

Yoshihiro KAWANA（*Professor of Department of Psychology, Rissho University*）


## Abstract

The internet survey was conducted with 518 men and 606 women respondents, age from 20 to 49, all of them from the Tokyo and around areas. The respondents were asked on the most loving opposite-sex person, in daily life. The collected data were categorized into six types of relationships: friends, unrequited lovers, lovers, fiancées, marriage partners, and extramarital partners.

Factor analysis was used to identify the elements of attractiveness, which resulted in the extraction of four factors: aesthetic attractiveness, social position and wealth, interpersonal attractiveness and social attractiveness. The three-way（sex, age generation, relationship with the partner）multivariate analysis of variance was performed using factor scores of attractiveness as the dependent variables.

As a result of the analysis, men seemed to have a relationship with the female partners with high aesthetic and interpersonal attractiveness in many types of relationship. On the other hand, women showed the tendency to have a relationship with men who have high social status and wealth as well as social attractiveness in many types of relationship. The study results revealed that the complementarity of attractiveness exists between men and women, both are attracted to a person who has different features which they do not possess. In a marriage relationship, the partner's attractiveness scored the lowest. It was presumed that in marriage, people decide their partners by giving up much of the seeking attractiveness criterion. As a next step, the three-way（sex, age generation, relationship with the partner）multivariate analysis was performed on the satisfaction and happiness degree from the perspective of relationship. The results showed that the degree of satisfaction and happiness that come from the relationship were higher in order of prospective spouse（fiancé or fiancée）, marriage partner, and lover. The levels of satisfaction and happiness in an extramarital relationship were significantly lower than that of a married couple.

We will continue to analyze contradictions between the results of attractiveness, satisfaction, and happiness degree. The emotional connection between partners was also studied and discussed from the perspective of "giving and receiving love."


Key words：Male-female relationship, attractiveness, satisfaction, love

## 問題と目的

### 先行研究

筆者らの男女間の愛情関係の研究は、恋愛の進展段階の研究からスタートした。川名・齊藤（2009）で「恋愛の進展段階」、および川名・齊藤（2010）で「恋愛の進展段階（２）」の研究を行った。川名らはこの２つの研究を通して、恋愛の進展段階については、「友達段階」、「片思い段階」、「精神的恋人段階」、「性的恋人段階」の４段階を設定した。

また、男女の恋愛の進展に影響を及ぼす重要要因である言語や行動の交流内容に関しては、松井（1993, 2000）の研究を参考に、「コミュニケーション」、「共行動」、「身体接触」、「いさかい」という交流内容の４つの側面を男女関係の交流内容として設定した。

また、男女を結びつける感情的欲求的要因については、Sternberg（1986）の「愛情の三角理論」で展開された３つの因子を参考に、男女を結びつける愛情の三角理論の「親密性」、「情熱性」、「コミットメント」に加えて「性欲性」という４つの男女を結びつける感情

的欲求的要因を設定した。Sternberg（1986）の「愛情の三角理論」では、性欲性は情熱性に含まれるものとして扱われているが、「恋心」と「性欲」とは、違う性質を示す場面も多いので、別の概念として扱うことにした。

交流内容の４成分と男女を結びつける感情的欲求的要因の４成分の合計８つの側面に関して、男女関係の進展段階を比較検討した。

しかし、これらの研究のサンプルは、20歳前後の大学生の男女という小規模サンプルで、さまざまな結論の妥当性の検証には、より年齢層が広く、かつ大サンプルも必要であろう。また、学生サンプルであると、男女関係の進展も婚約以前ということになるので、数少ない婚約関係段階のサンプル、さらに結婚後の夫婦関係のサンプルも必要で大規模調査が望まれた。

そこで川名（2014）は、日本全国の20代～40代の男女それぞれ1000人弱の大サンプルでインターネット調査を実施した。友人、片思い、精神的恋人（プラトニック関係）、性的恋人、婚約者、結婚相手という６つのすべての関係進展段階のサンプルを集めた。そこでデータ分析のうち、交流内容側面（コミュニケーション、共行動、身体接触、いさかいの側面）の結果を報告した。これらの交流内容側面を男女比較と20代～40代の年代間で比較した。分析の結果、男性は女性よりも進展段階の初期の段階でコミュニケーションおよび共行動において活発である一方、女性は進展段階の後半、とくに婚約段階以後において交流内容において活発であった。身体接触傾向に関しては、男性は女性よりすべての進展段階でより活発であった。世代間比較では、20代のカップルは、30代や40代のカップルより、コミュニケーション、共行動、身体接触の全てでより活発であることが明らかにされた。他方、意見不一致などの「いさかい」は、進展段階が進むほど多くなり、夫婦関係で頂点に達することが分かった。男性の浮気傾向は、すべての進展段階で女性の浮気傾向を上回っていた。特に女性は、結婚後は急激に浮気傾向がなくなることが分かった。嫉妬に関しては、予想に反して男性の嫉妬傾向は女性の嫉妬傾向より高かった。男性は婚約後から夫婦関係にかけて嫉妬傾向が特に高いことが分かった。

川名（2016）では、男女を結び付ける感情的欲求的要因（親密性、情熱性、性欲性、コミットメント）について分析をした。これらの感情的欲求的要因を性別、関係進展段階、年代について比較した。その結果、男性は女性より「性欲性」がすべての関係段階で上回ったのに対して、女性は相互の愛情的関係が形成された後では、男性以上に「親密性」が高いことが分かった。また、「情熱性」に関しては、男女は片思い段階以後から結婚以前まで同じ程度に高かったが、女性は結婚後、急激に情熱性が下降するのに対して、男性は結婚後も女性より情熱性は維持されていた。男性は、「性欲性」と「情熱性」において女性より上回り、女性は男性との関係が確定する婚約以後、結婚期間を通して「親密性」において、男性を上回っていることが分かった。男性は男女の関係段階の初期から性的恋人になるまで、積極的に相手の女性にアプローチするのに対して、女性は男女の関係段階の最後の段階の婚約、結婚段階で相手への「コミットメント」が大きくなることが分かった。

川名（2017）は、男女間の「交流内容」（コミュニケーション、共行動、身体接触）と、「感情的欲求的要因」（親密性、情熱性、性欲性、コミットメント）とが、どのような関係にあるかを特に男女比較で比較検討した。その結果、「親密性」に影響を及ぼすのは、男性においては共行動、身体接触、コミュニケーションという関係順位であり、女性においてはコミュニケーション、共行動、身体接触という順序であった。男性においては身体接触が、女性においては、コミュニケーションが親密性の構築に影響を及ぼしているようである。「情熱性」は、身体接触、コミュニケーションとの関係が深かった。「性欲性」と関係の深い交流内容は、男女とも身体接触のみであった。「コミットメント」との関係では、男女とも身体接触が最も大きな影響力があり、続いて共行動、コミュニケーションという関係順序であった。

川名（2018）は、クラスタ分析の手法を用いて、男女カップルを精神的恋人関係、性的恋人関係、結婚関係に分類し、また、男性データと女性データを区別して、男女関係の類型を分析して記述した。その結果、男女カップルは、「相思相愛カップル」、「仲が良いのに喧嘩する平均的カップル」、「冷えているが関係が続いているカップル」、「別れが予感されるカップル」の４種類におおよそ分類されることが分かった。

以上の研究では、男女関係のポジティブな交流内容（コミュニケーション、共行動、身体接触）とネガティブな交流内容（意見不一致、喧嘩、嫉妬、浮気）および、感情的欲求的要因（親密性、情熱性、性欲性、コミットメント）などの側面を男女関係の良しあしの影響変数として研究してきたが、それらの研究で不足していた情報は、カップルの当人同士の魅力側面（美的魅力、社会的地位と富、対人的魅力、社会的魅力など）であった。

以前の男女関係の魅力の側面に注目した研究としては、川名（2011）において女性から男性の写真を判定した研究があるが、写真を見ての魅力評定と、その写真人物と友達、恋人、性的交渉相手、結婚相手として

付き合いたいという希望との間で重回帰分析を行ったところ、友達希望、恋人希望、性的希望の相手としての場合は、美的魅力の重要性が高かったが、結婚相手では、真面目さや有能性などの「社会的魅力」が最重要で美的魅力は対人的魅力や健康的魅力の次ぐらいに重要性が落ちている結果であった。

他方、男性から見た女性の魅力についても、川名（2013）において数多くの女性の写真を使った研究結果から、男性は相手との関係が友達関係、恋人関係、性的関係、結婚関係を通して、性的美的魅力を最も重視していることが判明した。特に30代、40代の男性は、性的美的魅力と若さと健康魅力を交際希望の要件として重視していて、対人的魅力や社会的魅力は有意な影響力をもっていなかった。しかし、20代の男性では、性的美的魅力が最重要であることには変わりはないが、対人的魅力や社会的魅力も交際希望の要件として有意に影響をしていた。

### 本研究の目的

異性の刺激が写真刺激であるというのが、付き合う前の交際希望の魅力の影響力の大きさに限定されるのが限界であった。本研究では写真刺激ではなく、実際の付き合い相手の魅力や関係満足度、関係幸福度のデータをインターネット調査で収集することにした。

また、本研究は、以下の６つの男女関係（友達、片思い、恋人、婚約者、結婚相手、不倫相手）についてそれぞれの相手にどのような魅力をもとめているか、また、相手との関係満足度および関係幸福度について比較することを目的とする。

## 方　法

### 被調査者と調査時期

インターネット調査会社の登録者サンプルから、東京および近県の首都圏の20～49歳の男女にオンライン・アンケート調査を依頼した。調査実施期間は2017年12月であった。有効データ数は、合計1124人（女性606人、男性518人）で、そのデータ構成は、20代～40代（20歳～49歳）の男女に最も親しい異性を思い浮かべ、その相手が友人、片思いの相手、恋人、婚約者、結婚相手、不倫相手のそれぞれのカテゴリーに属する被調査者について、ある程度バランスの取れたデータを収集した。

インターネット調査で得られたデータの男女数、各関係で得られたデータ数および男女関係の種類とデータ数については、Table １を参照。

### 調査内容

インターネット調査で使用された質問内容の最初の教示は以下のとおりである。

「現在のあなたにとって最も親しくしている異性または好きな異性（配偶者以外の家族を除く）を一人だけ思い浮かべ、以下の各質問にご回答をお願いいたします。回答は匿名であり、個人情報が特定されることはありませんので、ご安心して正直な回答をお願いします。」

その次に、以下のような自分と相手についてのカテゴリー質問であった。当人の性別、年齢、結婚状況（未婚、既婚、離婚単身、死別単身）、相手との関係（友達、片思いの相手、恋人、婚約者、結婚相手、不倫相手）、相手の年齢、相手の結婚状況（未婚、既婚、離婚単身、死別単身）

次に、相手の魅力および自分の魅力について、Table ２の20項目について７段階評定をしてもらった。

最後に、相手との関係満足度、関係幸福度を７段階評定でしてもらった。

Table １　調査データ数（n）内訳

| 関係 | 男性 | 女性 | 合計 |
|---|---|---|---|
| １．友達 | 89 | 90 | 179 |
| ２．片思い相手 | 93 | 93 | 186 |
| ３．恋人 | 87 | 106 | 193 |
| ４．婚約者 | 77 | 90 | 167 |
| ５．結婚相手 | 96 | 126 | 222 |
| ６．不倫相手 | 76 | 101 | 177 |
| 合計 | 518 | 606 | 1124 |

## 結果と考察

### 自他の魅力の因子分析：

自他の魅力20項目について、主因子法、プロマックス法によって因子分析をした結果、「美的魅力因子」、「対人的魅力因子」、「社会的魅力因子」、「地位と富」の４因子を抽出した。４因子に因子負荷量の高い項目をTable ３に示す。

### 相手の魅力の多変量分散分析：

因子分析の結果、抽出された相手の魅力である「美的魅力」、「対人的魅力」、「社会的魅力」および「地位と富」の４つを目的変数とし、また、被調査者当人の「本人性別」、「相手年代」（年齢から20代、30代、40代のみを利用）、「相手との関係」を比較変数として、三元配置多変量分散分析を行った。

Table ４に相手の魅力の分散分析表を示す。

相手との関係および、男女差、年代差の多重比較検定の結果のうち、有意差だけがあった比較をTable ５、

Table 2　自他調査魅力項目

| | |
|---|---|
| 問１ | かわいい |
| 問２ | ルックスがいい |
| 問３ | 美しい |
| 問４ | 背が高い |
| 問５ | スタイルがいい |
| 問６ | 上品な |
| 問７ | セクシー |
| 問８ | 健康的な |
| 問９ | 若い |
| 問10 | 明るい |
| 問11 | 面白い |
| 問12 | 社交的な |
| 問13 | 思いやりのある |
| 問14 | 支配的な |
| 問15 | 有能な |
| 問16 | 頭がいい |
| 問17 | 勤勉な |
| 問18 | 真面目な |
| 問19 | お金持ちな |
| 問20 | 社会的地位が高い |

Table 3　自他の魅力の因子分析（プロマックス法）

| 美的魅力　因子 | 因子負荷量 |
|---|---|
| ３．美しい | 0.9415 |
| ２．ルックスがいい | 0.8876 |
| １．かわいい | 0.8284 |
| ５．スタイルがいい | 0.5996 |
| ６．上品な | 0.5905 |

| 対人的魅力　因子 | 因子負荷量 |
|---|---|
| 10.　明るい | 0.9424 |
| 12.　社交的な | 0.8083 |
| 11.　面白い | 0.7627 |
| 13.　思いやりのある | 0.4389 |

| 社会的魅力　因子 | 因子負荷量 |
|---|---|
| 17.　勤勉な | 0.8627 |
| 18.　真面目な | 0.8099 |
| 16.　頭がいい | 0.5073 |
| 15.　有能な | 0.3675 |

| 地位と富　因子 | 因子負荷量 |
|---|---|
| 20.　社会的地位が高い | 0.8687 |
| 19.　お金持ちな | 0.7658 |
| 14.　支配的な | 0.4726 |

Table 6 および Table 7 に示す。

**相手の美的魅力の男女差、関係差、年代差の比較：**

美的魅力の分散分析の結果、本人性別、相手との関係および相手年代の主効果がいずれも１％レベル以下で有意であった。交互作用効果はいずれも有意ではなかった。

Fig. 1 - 1 の相手の美的魅力について男女比較をすると、全ての関係で男性の方が女性より、平均（グラフの０得点）より美しい相手と関係を持っている。男性は男女関係に美的魅力を重視していることが分かる。最も美的魅力の高い相手は、「片思い相手」であり、そこから現実にカップルとして成立してゆく「恋人関係」、「婚約関係」「結婚関係」と次第に美的魅力がなだらかに落ちていくのは、関係を成立させるために次第に「妥協」をしていくからだと考えられる。最後の「不倫関係」で美的魅力がかなり上がっている。結婚相手より不倫相手に美的魅力を求めているからであろうか。

男性と比較して、女性は友達関係から結婚関係に至るまで、相手に美的魅力を求めていないように見える。ただし、「不倫関係」だけは、女性も「美的魅力」のある相手を選んでいるのが分かる。おそらく、考えられるのは、「結婚相手」という目標をもった「片思い」から「結婚相手」に至る関係では、女性は相手に「美的魅力」を求めないよう抑制して結婚相手に適合した他の魅力を期待しているのであろう。女性も片思い関係から結婚相手に移るに従って、美的魅力を諦めていることがなだらかな下降曲線に現れているのであろう。男女とも理想から現実可能性への諦めが、なだらかな下降曲線に現れていると考えられる。

Fig. 1 - 2 は、「相手の美的魅力」の関係比較と相手年代比較のグラフである。相手の年代による主効果が有意であった。相手の美的魅力も20代、30代より40代において下がっているのが分かる。Fig. 1 - 3 を見ると、男女で相手に期待する魅力が、男性では平均以上で、女性では平均以下であることが分かる。20代、30代、

Table 4　分散分析表（相手の魅力）

| 因　子 | 目的変数 | Type Ⅲ平方和 | 自由度 | 平均平方 | F 値 | P 値 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 本人性別 | 美的魅力（相手） | 71.2076 | 1 | 71.2076 | 98.4556 | P < 0.001 | ** |
| | 社会的魅力（相手） | 9.3630 | 1 | 9.3630 | 10.8447 | 0.0010 | ** |
| | 対人的魅力（相手） | 0.3198 | 1 | 0.3198 | 0.3588 | 0.5493 | |
| | 地位と富（相手） | 12.7192 | 1 | 12.7192 | 16.7809 | P < 0.001 | ** |
| 相手との関係 | 美的魅力（相手） | 36.2950 | 5 | 7.2590 | 10.0367 | P < 0.001 | ** |
| | 社会的魅力（相手） | 15.1168 | 5 | 3.0234 | 3.5018 | 0.0038 | ** |
| | 対人的魅力（相手） | 9.2482 | 5 | 1.8496 | 2.0752 | 0.0662 | |
| | 地位と富（相手） | 12.1739 | 5 | 2.4348 | 3.2123 | 0.0070 | ** |
| 相手年代 | 美的魅力（相手） | 11.8709 | 2 | 5.9355 | 8.2067 | P < 0.001 | ** |
| | 社会的魅力（相手） | 0.7228 | 2 | 0.3614 | 0.4186 | 0.6581 | |
| | 対人的魅力（相手） | 9.5303 | 2 | 4.7651 | 5.3462 | 0.0049 | ** |
| | 地位と富（相手） | 3.2265 | 2 | 1.6133 | 2.1284 | 0.1196 | |
| 本人性別 * 相手との関係 | 美的魅力（相手） | 6.3593 | 5 | 1.2719 | 1.7585 | 0.1187 | |
| | 社会的魅力（相手） | 5.5853 | 5 | 1.1171 | 1.2938 | 0.2642 | |
| | 対人的魅力（相手） | 6.7089 | 5 | 1.3418 | 1.5054 | 0.1854 | |
| | 地位と富（相手） | 11.8965 | 5 | 2.3793 | 3.1391 | 0.0081 | ** |
| 本人性別 * 相手年代 | 美的魅力（相手） | 2.5487 | 2 | 1.2743 | 1.7620 | 0.1722 | |
| | 社会的魅力（相手） | 1.0421 | 2 | 0.5211 | 0.6035 | 0.5471 | |
| | 対人的魅力（相手） | 2.8230 | 2 | 1.4115 | 1.5836 | 0.2058 | |
| | 地位と富（相手） | 0.9393 | 2 | 0.4696 | 0.6196 | 0.5384 | |
| 相手との関係 * 相手年代 | 美的魅力（相手） | 11.8169 | 10 | 1.1817 | 1.6339 | 0.0921 | |
| | 社会的魅力（相手） | 7.0910 | 10 | 0.7091 | 0.8213 | 0.6081 | |
| | 対人的魅力（相手） | 7.9009 | 10 | 0.7901 | 0.8864 | 0.5454 | |
| | 地位と富（相手） | 12.0803 | 10 | 1.2080 | 1.5938 | 0.1033 | |
| 本人性別 * 相手との関係 * 相手年代 | 美的魅力（相手） | 8.6015 | 10 | 0.8601 | 1.1893 | 0.2939 | |
| | 社会的魅力（相手） | 7.1995 | 10 | 0.7199 | 0.8339 | 0.5959 | |
| | 対人的魅力（相手） | 2.3467 | 10 | 0.2347 | 0.2633 | 0.9887 | |
| | 地位と富（相手） | 10.0074 | 10 | 1.0007 | 1.3203 | 0.2144 | |
| 誤差 | 美的魅力（相手） | 715.2901 | 989 | 0.7232 | | | |
| | 社会的魅力（相手） | 853.8705 | 989 | 0.8634 | | | |
| | 対人的魅力（相手） | 881.5069 | 989 | 0.8913 | | | |
| | 地位と富（相手） | 749.6198 | 989 | 0.7580 | | | |
| 全体 | 美的魅力（相手） | 885.5513 | 1024 | | | | |
| | 社会的魅力（相手） | 907.7039 | 1024 | | | | |
| | 対人的魅力（相手） | 927.1861 | 1024 | | | | |
| | 地位と富（相手） | 820.7676 | 1024 | | | | |

*：P<0.05　**：P<0.01

Table 5 「本人性別」の各水準における「相手との関係」の多重比較検定

| 目的変数 | 手法 | 本人性別 | 水準１ | 水準２ | 平均１ | 平均２ | 差 | 標準誤差 | 統計量 | P 値 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 男性 | １．友達 | ２．片思い相手 | 0.0380 | 0.6942 | 0.6562 | 0.1454 | 4.0711 | 0.0012 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 男性 | ２．片思い相手 | ５．結婚相手 | 0.6942 | 0.1591 | 0.5351 | 0.1363 | 3.0829 | 0.0091 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 女性 | １．友達 | ６．不倫相手 | −0.3736 | 0.2421 | 0.6157 | 0.1466 | 3.5288 | 0.0036 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 女性 | ３．恋人 | ６．不倫相手 | −0.3117 | 0.2421 | 0.5538 | 0.1442 | 2.9484 | 0.0119 | * |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 女性 | ４．婚約者 | ６．不倫相手 | −0.3117 | 0.2421 | 0.5539 | 0.1520 | 2.6561 | 0.0215 | * |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | 女性 | ５．結婚相手 | ６．不倫相手 | −0.4669 | 0.2421 | 0.7090 | 0.1438 | 4.8621 | P<0.001 | ** |
| 対人的魅力（相手） | Scheffe | 女性 | ２．片思い相手 | ６．不倫相手 | −0.2316 | 0.3193 | 0.5509 | 0.1634 | 2.2728 | 0.0455 | * |
| 地位と富（相手） | Scheffe | 女性 | ２．片思い相手 | ５．結婚相手 | 0.3090 | −0.2358 | 0.5448 | 0.1327 | 3.3693 | 0.0050 | ** |
| 地位と富（相手） | Scheffe | 女性 | ５．結婚相手 | ６．不倫相手 | −0.2358 | 0.4490 | 0.6848 | 0.1472 | 4.3283 | P<0.001 | ** |

*：P<0.05　**：P<0.01

Table 6 「相手との関係」の各水準における「本人性別」の多重比較検定

| 目的変数 | 手法 | 相手との関係 | 男性平均 | 女性平均 | 差 | 標準誤差 | 統計量 | P 値 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美的魅力（相手） | Scheffe | １．友達 | 0.0380 | −0.3736 | 0.4116 | 0.1380 | 8.8940 | 0.0029 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | ２．片思い相手 | 0.6942 | −0.1063 | 0.8005 | 0.1404 | 32.4911 | P < 0.001 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | ３．恋人 | 0.3711 | −0.3117 | 0.6828 | 0.1408 | 23.5274 | P < 0.001 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | ４．婚約者 | 0.3247 | −0.3117 | 0.6364 | 0.1418 | 20.1432 | P < 0.001 | ** |
| 美的魅力（相手） | Scheffe | ５．結婚相手 | 0.1591 | −0.4669 | 0.6260 | 0.1252 | 25.0133 | P < 0.001 | ** |
| 社会的魅力（相手） | Scheffe | ６．不倫相手 | −0.2964 | 0.2793 | 0.5757 | 0.1715 | 11.2672 | P < 0.001 | ** |
| 対人的魅力（相手） | Scheffe | ２．片思い相手 | 0.1356 | −0.2316 | 0.3673 | 0.1559 | 5.5494 | 0.0187 | * |
| 地位と富（相手） | Scheffe | ２．片思い相手 | −0.1606 | 0.3090 | 0.4696 | 0.1438 | 10.6678 | 0.0011 | ** |
| 地位と富（相手） | Scheffe | ６．不倫相手 | −0.1913 | 0.4490 | 0.6403 | 0.1607 | 15.8778 | P < 0.001 | ** |

*：P<0.05　**：P<0.01

Table 7 「相手との関係」の各水準における「相手年代」の多重比較検定

| 目的変数 | 手法 | 相手との関係 | 水準１ | 水準２ | 平均１ | 平均２ | 差 | 標準誤差 | 統計量 | P 値 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美的魅力（相手） | Scheffe | ４．婚約者 | 20代 | 40代 | 0.2584 | −0.3112 | 0.5696 | 0.1854 | 4.7195 | 0.0091 | ** |
| 対人的魅力（相手） | Scheffe | ２．片思い相手 | 20代 | 40代 | 0.1987 | −0.4001 | 0.5987 | 0.2064 | 4.2072 | 0.0152 | * |
| 地位と富（相手） | Scheffe | ２．片思い相手 | 20代 | 30代 | −0.1447 | 0.2454 | 0.3901 | 0.1511 | 3.3352 | 0.0360 | * |

*：P<0.05　**：P<0.01

40代と相手の美的魅力は落ちていくのが分かる。

**相手の「地位と富」の男女差、関係差、年代差の比較：**

相手の「地位と富」に関しては、本人性別×相手との関係の交互作用効果が１％レベル以下で有意であった。本人性別、相手との関係のそれぞれについて単純主効果が有意であった。

Fig. 2 - 1 の相手の地位と富の相手との関係×本人性別のグラフを見ると、女性は相手の男性に社会的地位と富を期待しているのが分かる。

それに対して、男性は相手の女性に社会的地位や富はあまり期待していないのが分かるであろう。女性は片思いの相手にかなり「地位と富」を期待しているが、「恋人」、「婚約者」、「結婚相手」としだいに相手の「地位と富」の評定が下がるのは、現実に関係が成立できる相手に移行するにあたって次第に「地位と富」を諦めて行っていると解釈できるであろう。「結婚相手」となると、平均値の０以下になっている。希望は高いが現実は低いということであろう。しかし、不倫相手の「地位と富」が片思い相手以上に高いのは驚きである。不倫相手に結婚相手にはない「地位と富」の魅力の高い相手を求めていることが分かる。

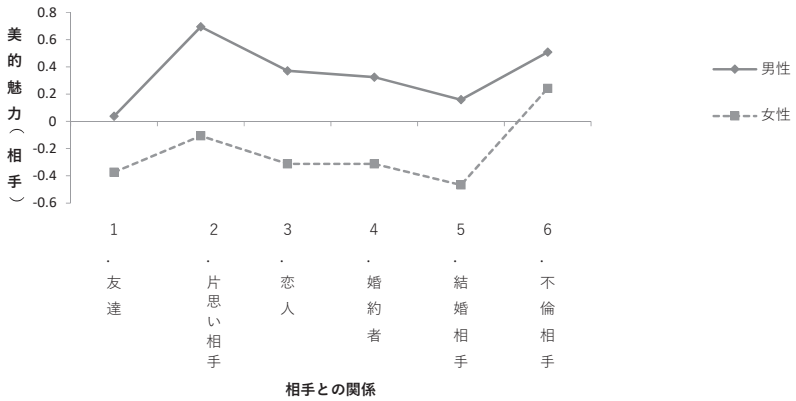


Fig. 1-1　美的魅力（相手）の平均値【本人性別×相手との関係】

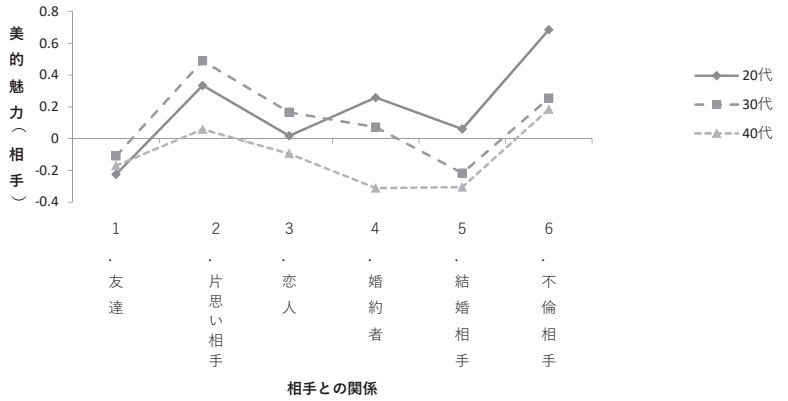


Fig. 1-2　美的魅力（相手）の平均値【相手との関係×相手年代】

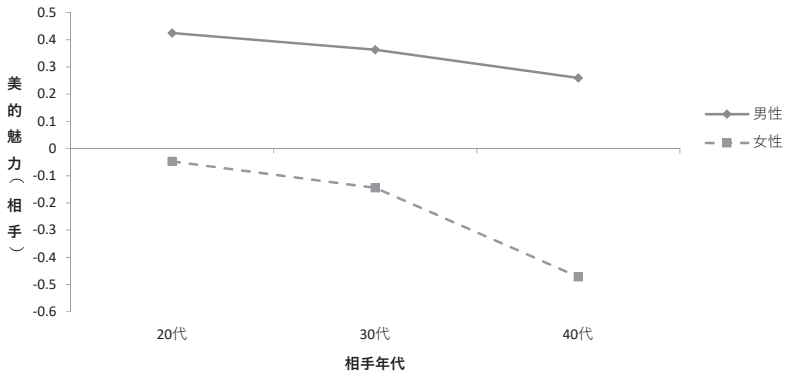


Fig. 1-3　美的魅力（相手）の平均値【相手年代×本人性別】

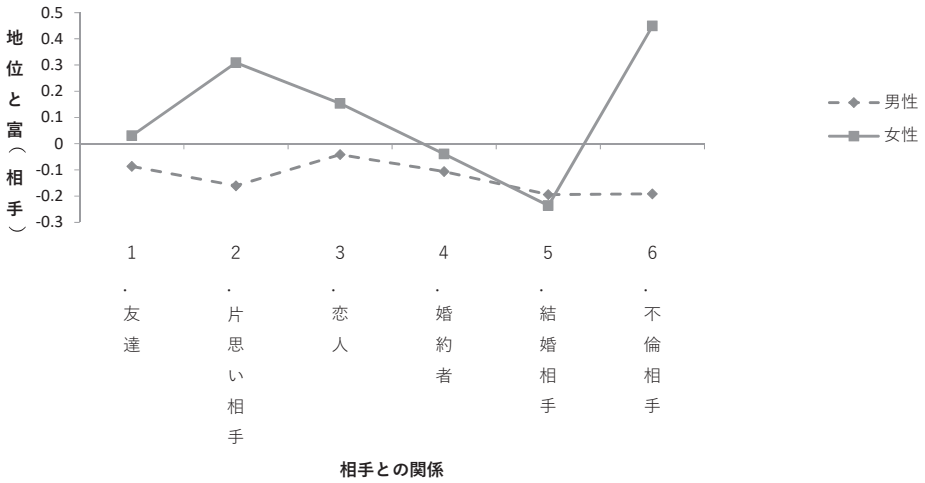


Fig. 2-1　地位と富（相手）の平均値【相手との関係×本人性別】

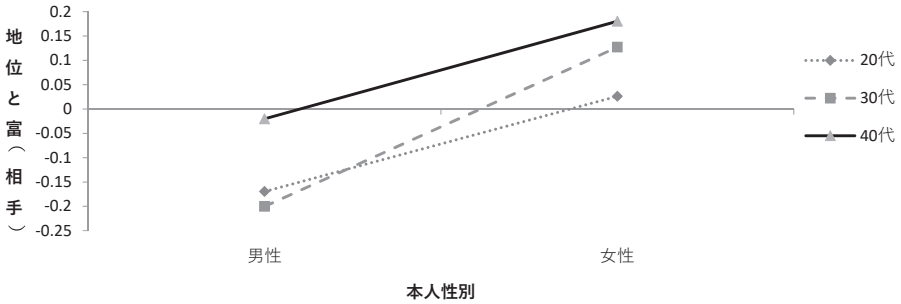


Fig. 2-2　地位と富（相手）の平均値【本人性別×相手年代】

男性の方を見ると、男性はすべての関係で相手に「地位と富」を期待していないのが見て取れる。

Fig. 2-2は、相手の「地位と富」を性別×年代で示したグラフである。

男性より女性の方が、相手に地位と富を求めるが、男女とも20～30代よりも40代の方が相手の「地位と富」の評定があがることが見て取れる。加齢に従って、社会的地位や収入が増えていくからなのだと思われる。

「美的魅力」と「地位と富」の魅力は、男女でミラーイメージを形成している。つまり、男女関係において男性は女性に「美的魅力」を期待し、女性は男性に「地位と富」を期待しているとうことである。

さて、次に相手の魅力のうち、内面的魅力とか性格的魅力といわれる「対人的魅力」と「社会的魅力」の結果について見てみよう。

**相手の対人的魅力の男女差、関係差、年代差の比較：**

相手の「対人的魅力」の分散分析の結果、「年代」の主効果のみが１％レベル以下で有意であった。相手の年代が進むと、対人的魅力が下がるという結果である。Fig. 3-1を見ると、男性は片思い、恋人、婚約者および不倫相手で対人的魅力のある女性を相手としている。結婚相手だけが対人的魅力が平均値を下回っている。女性は、結婚相手まで相手に対人的魅力を求めていないようである。不倫相手だけが対人的魅力が特に高い。だだし、多重比較検定の結果、男女で有意差のあるのは、片思い関係だけである。片思い関係の相手の男性は、女性から見てかなり対人的魅力が低いと評定されている。

Fig. 3-2を見ると、40代の相手の「対人的魅力」が20代、30代より低いのが分かる。この結果の解釈としては、年齢が上がると対人的魅力が下がるのか、40代になるまで、異性パートナーができなかったのは、も

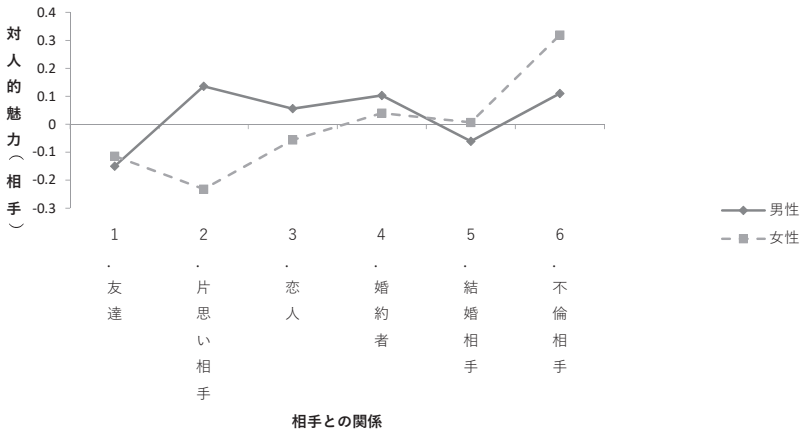


Fig. 3-1　対人的魅力（相手）の平均値【相手との関係×本人性別】

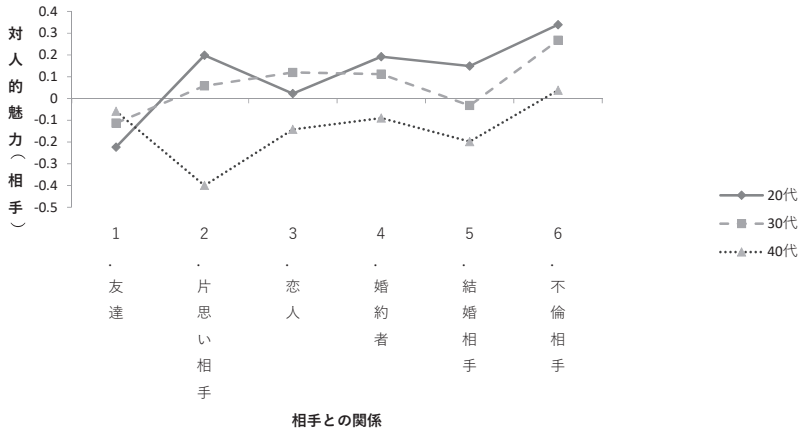


Fig. 3-2　対人的魅力（相手）の平均値【相手との関係×相手年代】

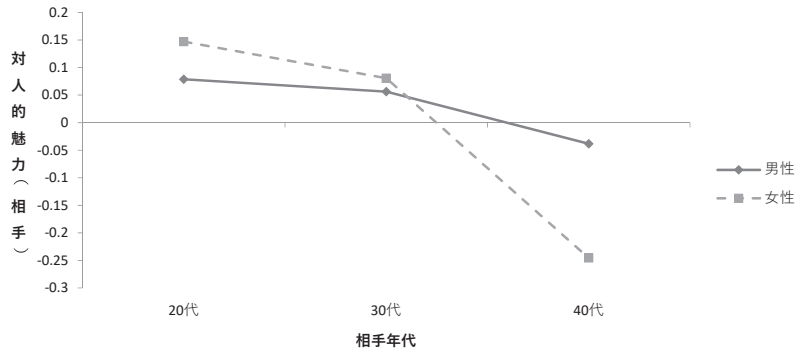


Fig. 3-3　対人的魅力（相手）の平均値【相手年代×本人性別】

ともと「対人的魅力」が低い人が「売れ残った」という可能性も考えられる。Fig. 3 - 3 を見ても分かるように相手の年代が40代の男性の対人的魅力が女性より低いのが見て取れる。男性で「対人的魅力」がないと異性パートナーが見つかりにくいのかもしれない。

Fig. 3 - 1 を見ると、一般的には男性より女性の方が「対人的魅力」が高い傾向に見えるが、「不倫関係」だけ、相手の男性の「対人的魅力」が高いのは、例外的である。

多重比較検定の結果、「片思いの相手」では、相手が20代より40代の方で有意に対人的魅力が低いという結果が出ている。

性差の主効果は有意ではないが、多重比較検定の結果、女性の片思い相手（男性）の対人的魅力が男性の片思い相手（女性）より有意に低いという結果がでた。男性の「片思い相手」は「冷たい」ということである。

また、女性の場合、相手が「片思い相手」より「不倫相手」の方が有意に相手の男性の「対人的魅力」が高い。

**相手の社会的魅力の男女差、関係差、年代差の比較：**

相手の「社会的魅力」の分散分析の結果を見ると、「本人の性別」と「相手との関係」において主効果が１％レベル以下で有意である。

Fig. 4 - 1 の相手の社会的魅力のグラフを見ると、女性の方がすべての関係で「社会的魅力」の高い男性と付き合っているのが分かる。特に相手が「不倫相手」では、相手の男性の社会的魅力の認知が高い。女性は男性に勤勉さ、真面目さや頭の良さというような「社会的魅力」を求めていることが分かる。社会的魅力があれば、仕事もできるし、信頼もおけるということで女性が男性に期待する魅力であると言えよう。この「社会的魅力」も友達関係では相手に期待しないが、「片思い相手」でかなり期待しているが、「恋人」「婚約者」「結婚相手」で次第に下がってゆくのは、現実的に相手との関係が成立させるために、その魅力を諦めているのであろう。「結婚相手」では、平均以下に低くなっているが、「不倫相手」でかなり高いレベルに達している。結婚相手で期待できない社会的な魅力を不倫相手に求めているのであろう。

一方、男性は女性ほどには、相手に「社会的魅力」を期待していないようである。Fig. 4 - 1 を見ても、「片思い相手」以外は、付き合う女性の「社会的魅力」は、平均か、平均以下の評価である。多重比較検定の結果、不倫関係だけで男女が相手に求める社会的魅力に１％レベル以下で有意な差が認められた。

Fig. 3 - 1 の「対人的魅力」のグラフと、Fig. 4 - 1 の「社会的魅力」のグラフを比較してみると、男性と女性では、その関係がミラーイメージを形成しているかのように見える。つまり、男女関係において女性は男性に仕事とか家庭に貢献するような「社会的魅力」を男性に求め、それに対して、男性は女性に、外向性や優しさなどの対人的状況で快適な「対人的魅力」を期待しているかのように見える。

Fig. 4 - 2 および Fig. 4 - 3 のグラフを見ると、40代の「社会的魅力」が低いように見えるが、多重比較検定の結果、年代間の「社会的魅力」の平均には有意な差は認められなかった。

**男女での魅力の交換と魅力の相補性についての考察：**

以上、男女関係において、どういう魅力を持っている相手と付き合っているか魅力ごとに分析してみたが、全般的な様相を見てみよう。

Fig. 5 - 1 に男性から見た女性相手がもっている全関係での魅力をグラフでしめした。

このグラフを見て、全般的にわかるのは、男性は付合い相手の女性に第一に「美的魅力」を期待していることである。内面的な魅力については、「対人的魅力」のある相手の女性を選んでいる。４つのうちの二つの魅力を望んでいるのが分かるであろう。この二つの魅力は、「婚約者」段階で維持されているが、「結婚関係」となると、「美的魅力」のみが平均より上の評価で、他の「対人的魅力」、「社会的魅力」、「地位と富」の魅力は、いずれも平均値の０より下になっている。男性の不倫相手の女性の魅力は、「美的魅力」に加えて、「対人的魅力」を備えた相手で、「婚約段階」の相手と似た魅力構造になっている。

他方、Fig. 5 - 2 のグラフで女性がどのような魅力の男性相手を選んでいるかを見てみよう。「片思い相手」、「恋人」、「不倫相手」で顕著な魅力は、「地位と富」と「社会的魅力」の二つであることが分かる。

しかし、婚約者、結婚相手で「地位と富」をあきらめている。また、「婚約者」で、「社会的魅力」も「対人的魅力」もあったものが、「結婚相手」となると、それらもマイナス評価になってしまっている。

女性の不倫相手の男性の魅力を見ると、「結婚相手」とは対照的に、「地位と富」、「社会的魅力」、「対人的魅力」さらには、他の関係では期待してなかった「美的魅力」もプラス評価になっている。

男女とも結婚という関係で相手の魅力が下がってしまっているようである。

男性が「地位と富」と「社会的魅力」を持ち寄り、女性が「美的魅力」と「対人的魅力」を持ち寄り、男女カップルが成立するよう求めているのであるが、現実はそのような希望的期待が実現するとは限らないのであろう。男性の結婚相手の魅力では、「美的魅力」の

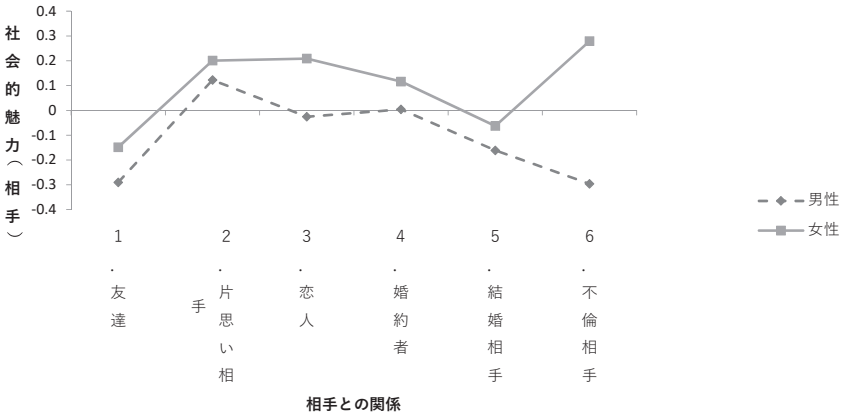


Fig. 4-1　社会的魅力（相手）の平均値【相手との関係×本人性別】

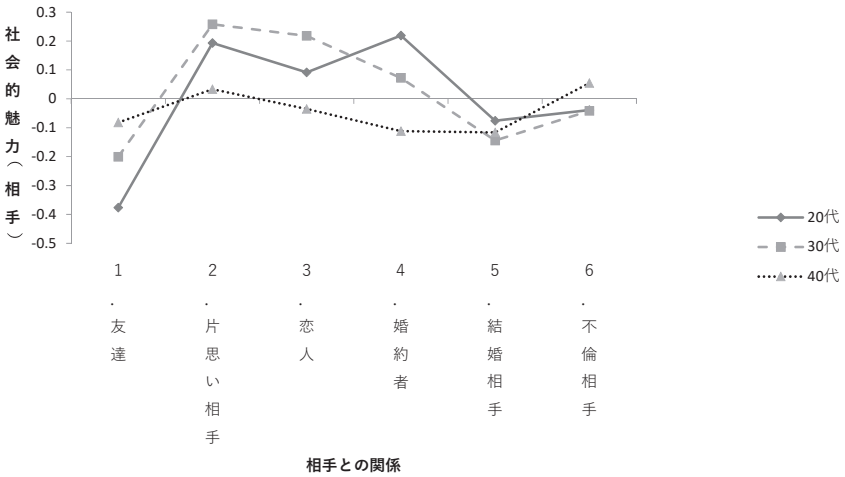


Fig. 4-2　社会的魅力（相手）の平均値【相手との関係×相手年代】

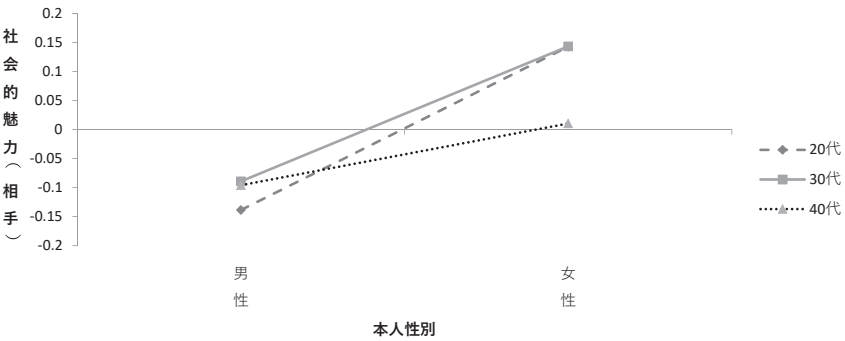


Fig. 4-3　社会的魅力（相手）の平均値【本人性別×相手年代】

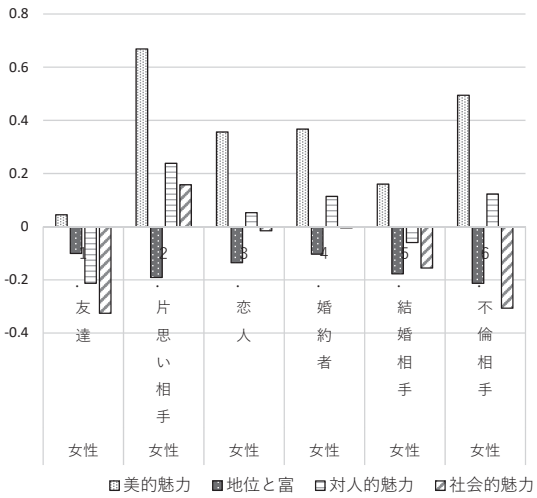


Fig. 5 - 1　相手女性の魅力

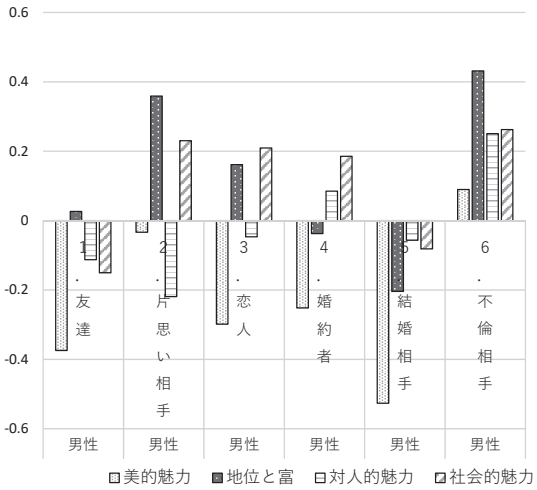


Fig. 5 - 2　相手男性の魅力

みがかろうじて高いが、あとの「対人的魅力」、「社会的魅力」、「地位と富」の評価は、全て平均以下の評価である。女性の結婚相手の魅力は、さらにひどく、すべての相手の魅力評価が平均より低くなっている。

結婚相手の魅力は、男女とも当初異性に期待したものと違うのが現実のようであるが、そもそも男女ともどの関係に自分が相手に期待している魅力が表現されているのであろうか？

それは、男性の場合は、「片思い相手」に表現されているであろう。男性の「片思い相手」の魅力では、相手の「美的魅力」は最も高く、「不倫相手」のそれより高い。さらに「対人的魅力」も「社会的魅力」も平均より高く評価されている。「地位と富」は期待していないというより望んでいないのである。男性はおそらく、「地位や富」において相手の女性より優位に立ちたいのだと思われる。

一方、女性の場合に相手に期待している魅力がそろっている関係はと見ると、「不倫関係」であろう。「不倫関係」では「結婚関係」と対照的に相手の「地位と富」の評価は高く、「社会的魅力」、「対人的魅力」も「美的魅力」も平均よりかなり高い評価である。すべての魅力が「不倫相手」ではそろっているのである。

しかし、「不倫的関係」は、社会的にも対人的にも非難される関係であるから、その関係の満足感、幸福感はどうであろうか？

次に男女関係における「関係満足感」と「関係幸福感」を検討してみよう。

**各男女関係における「関係満足度」と「関係幸福度」：**

Fig. 6 - 1 は、関係ごと、および男女別の関係満足度の平均のグラフである。分散分析の結果、関係の主効果のみが有意で、男女差は有意ではなかった。関係満足度は、婚約者が最も高く、続いて結婚関係、恋人関係となり、その次に不倫関係か友人関係となっている。しかし、片思い関係では評価平均が中点の 4 点以下で、明らかに不満足な関係である。

特に注目して欲しいのは、関係満足度の平均は、結婚相手＞不倫相手で、多重比較検定で女性では 1 %以下のレベルで有意差があった。男性はこの間は有意差には至っていなかった。この結果は、Fig. 5 - 1 および Fig. 5 - 2 の全般的魅力比較グラフにおいて、結婚相手の魅力度がほとんど平均以下で、不倫相手の魅力が全般的に平均以上の高得点あったことと対照的である。

Fig. 6 - 2 は、関係ごとおよび男女別の関係幸福度の平均のグラフである。こちらも分散分析の結果、関係の違いの主効果は 1 %以下のレベルで有意であったが、男女差は有意ではなかった。

全般的にみると関係満足度と関係幸福度の様相は、よく似ていて、関係幸福度は、婚約者、結婚相手、恋人関係で高い。次は不倫関係であるが、恋人関係に評価が近い。恋人関係が社会的に是認される関係なのに対して、不倫関係は社会的に非難される可能性のある関係であるという違いだけである。もう一つの関係満足度との違いは、片思い関係において、関係満足度はかなり不満足の領域であったが、関係幸福度は幸福とも不幸とも言えない境界領域（尺度点 4 点）であることである。

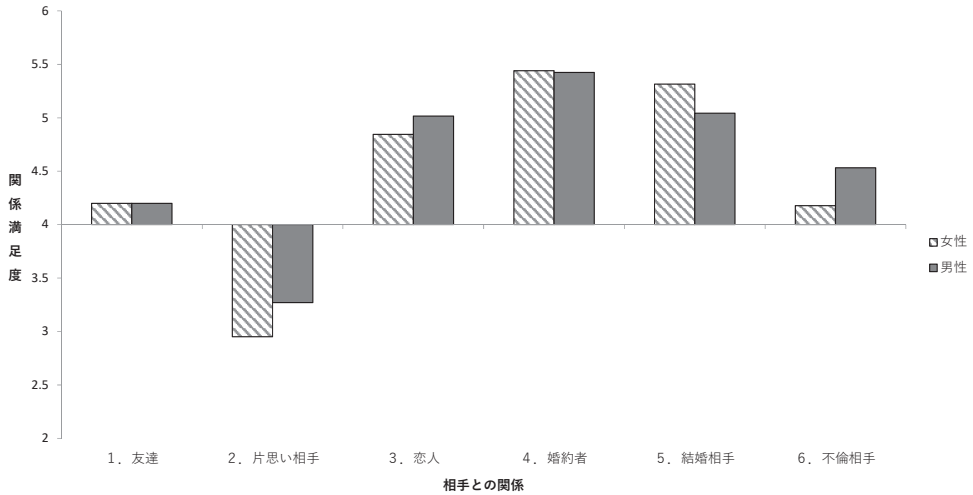


Fig. 6 - 1　関係満足度の平均値【相手との関係×本人性別】

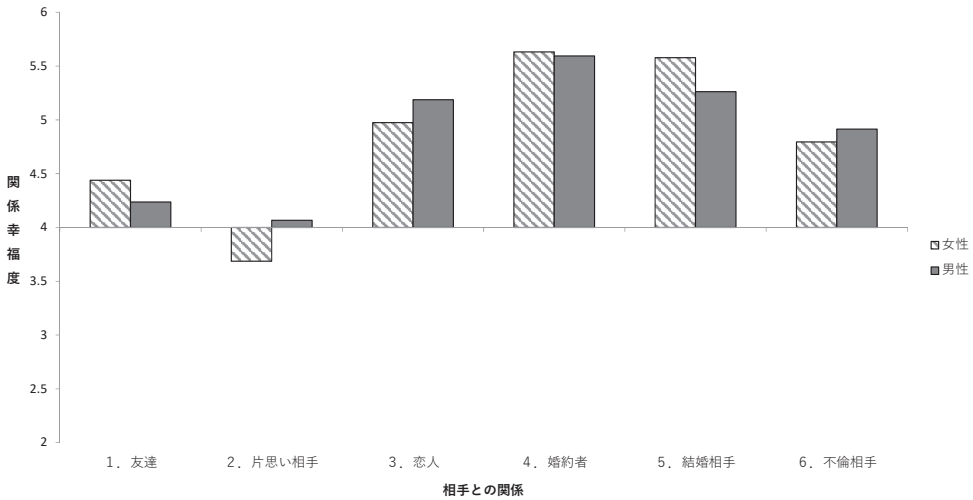


Fig. 6 - 2　関係幸福度の平均値【相手との関係×本人性別】

**各男女関係における「相手への愛」と「相手からの愛」：**

Fig. 7 - 1 は、関係ごと、および男女別の「相手への愛」の平均のグラフである。分散分析の結果、「本人性別」×「相手との関係」の交互作用効果が有意であった。「本人年代」による主効果はなかった。

男女差の比較では、性差の主効果はなかった。多重比較検定の結果、有意差があったのは、不倫関係の男女差（女性の相手への愛＞男性の相手への愛）と、友達関係の男女差（男性の相手への愛＞女性の相手への愛）であった。

関係間での「相手への愛」の比較を大きい順にすると、婚約者、結婚相手、恋人、不倫相手、片思い、友達という順であった。

結婚関係と不倫関係の間の比較では、20代でのみ有意差があったが（結婚相手への愛＞不倫相手への愛）、30代、40代では結婚相手と不倫相手の間での「相手への愛」の有意差はなかった。

Fig. 7 - 2 は、関係ごと、および男女別の「相手から愛」の平均のグラフである。分散分析の結果、「本人性別」×「相手との関係」の交互作用効果が有意であった。「本人年代」による主効果はなかった。

男女差の比較では、性差の主効果はなかったが、多重比較検定の結果、有意差があったのは、不倫関係の

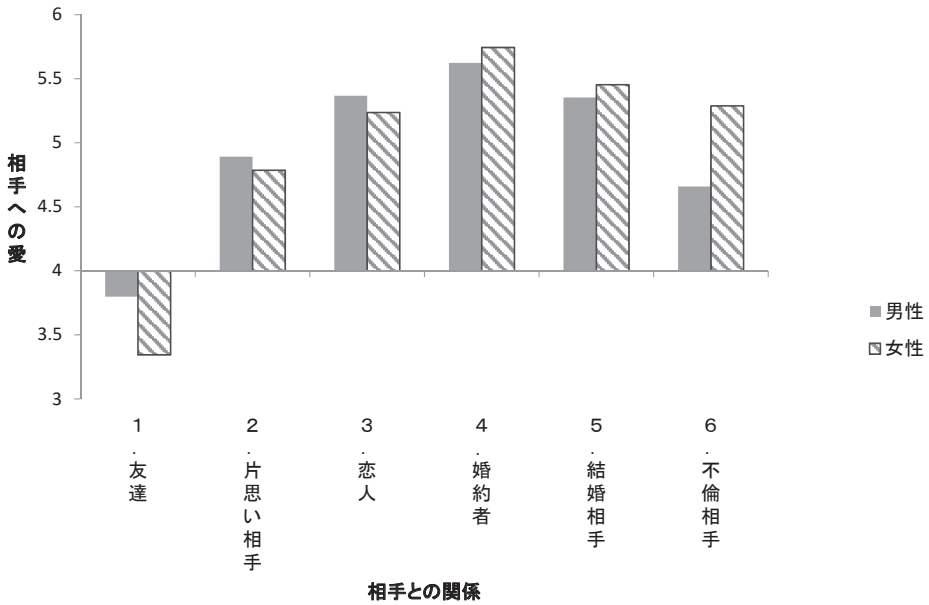


Fig. 7-1　相手への愛（1～7）【相手との関係×本人性別】

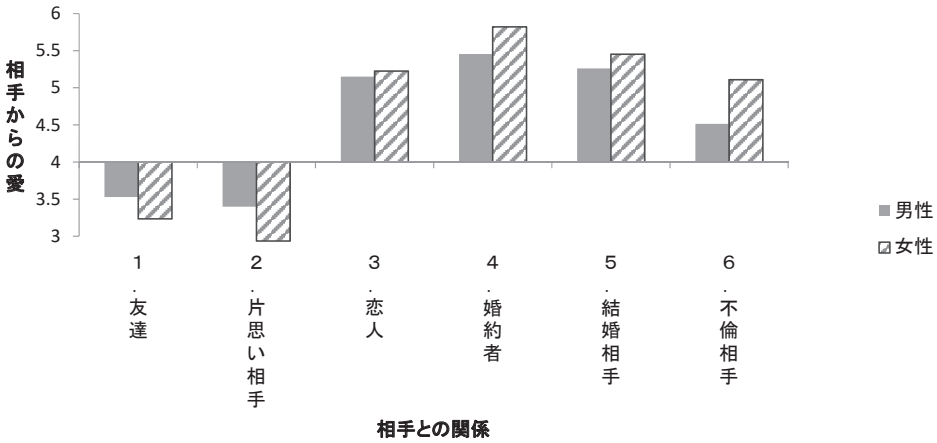


Fig. 7-2　相手からの愛（1～7）【相手との関係×本人性別】

男女差（女性の相手からの愛＞男性の相手からの愛）と、片思い関係の男女差（男性の相手からの愛＞女性の相手からの愛）であった。

関係間での「相手からの愛」の比較を大きい順にすると、婚約者、結婚相手、恋人、不倫相手、友達、片思いという順であった。

結婚関係と不倫関係の間の比較では、男性では有意差があったが（結婚相手からの愛＞不倫相手からの愛）、女性では結婚相手と不倫相手の間での「相手からの愛」の有意差はなかった。

男性では、「相手への愛」と「相手からの愛」で、結婚相手＞不倫相手という差があったのに、女性では、結婚相手と不倫相手の間で差がないということで、「不倫関係」に対する男女の意識の差が明らかになった。

## 総合的考察：

### 魅力の相補性

理論的に考えても、美的魅力、地位と富、対人的魅

力、社会的魅力の４つの魅力が全部揃っている相手が「理想的な」相手ということになるが、現実には４つの魅力を兼ね備えている相手はめったに見つからない。また、自分の方でもその４つのすべての魅力を兼ね備えるということは難しいのが現実である。そうなると、男女とも現実的に付き合える相手を探すときに「妥協」して重要でない魅力を「諦める」ことになる。今回の研究結果から、男性が諦めるのは、相手の「地位と富」と「社会的魅力」であり、女性が諦めるのは、相手の「美的魅力」と「対人的魅力」ということになるのであろう。しかし、諦めた魅力は、カップルのどちらかが所有している魅力ということになる。男性が、「地位と富」と「社会的魅力」を関係に持込み、女性が「美的魅力」と「対人的魅力」を関係に持ち込むと、二人で相補って４つの魅力がそろうことになる。魅力というのは、カップルの満足感や幸福感を高める物理的、心理的資源と考えると、男女がそれぞれ二つの魅力を持ち寄ると、合わせて４つの主要な魅力がそろうことになり、それが、カップルの満足感、幸福感を高めるのに役立つのではないだろうか。

こうした、男女の持ち寄る魅力の「相補性魅力」は、全ての魅力を片方だけでは用意できないカップルにとって、男女がカップルを形成することによって合理的に可能になるのではないかと思われる。

伝統的な「性役割期待」では、男性に仕事ができて収入もあり、真面目な人柄を期待し、女性には外見的な美しさと「愛嬌」というような対人的魅力を期待することによって、それぞれが異性から期待される魅力を磨くように動機づけられているのではないかと思われる。

## 関係満足感と関係幸福感を作るもの

今回の男女カップルにおける関係ごとの相手の魅力の平均値をみると、片思いの相手、不倫の相手、婚約者などで魅力評価が高いが、結婚関係での相手の魅力評価は、全般的に平均値を下回っている。

しかし、関係満足度や関係幸福度の平均を関係ごとに比較すると、婚約者関係が第１位であるが、結婚関係はそれに続いて第２位である。結婚関係は、相手の魅力平均が低いのに満足度、幸福度が高いのである。

それに対して、相手の魅力が全般的に高い、不倫関係では、関係満足度、関係幸福度は、恋人、婚約者、結婚相手よりも低いのである。

この点から考えて、関係の満足度および幸福度に影響を及ぼしている要因は相手の魅力以外の要因、すなわち、自分の魅力の要因、コミュニケーションや共行動、さらに相手からの愛や相手への愛などの要因も考えられる。

今後の分析としては、こうした「関係満足度」、「関係幸福度」の原因となっている原因要因、および「相手への愛」や「相手からの愛」の原因要因との相互の関係を分析していこうと考えている。

## 引用文献


金政祐司・大坊郁夫　2003　愛情の三角理論における３つの要素と親密な異性関係　感情心理学研究，**10**，11-24

川名好裕・齊藤勇　2009　恋愛の進展段階　日本社会心理学会　第50会大会発表論文集　112.

川名好裕・齊藤勇　2010　恋愛の進展段階（２）　日本社会心理学会　第51回大会発表論文集　74.

川名好裕　2011　外見から推定される男性の魅力　立正大学心理学研究所紀要　９号　89-101

川名好裕　2013　外見から推定される女性の魅力　立正大学心理学研究所紀要　11号　13-23

川名好裕　2014　男女関係の進展による交流内容の変化　立正大学心理学研究年報　第５号　11-25

川名好裕　2016　男女関係の進展による感情的欲求的要因の変化　立正大学心理学研究所紀要　14号　3-12

川名好裕　2017　男女の愛情関係：交流内容と心理的魅力との関係　立正大学心理学研究年報　第８号　1-13

川名好裕　2018　男女の愛情関係のスタイル　――クラスタ分析――　立正大学心理学研究年報　第９号　1-14

松井豊　1993　恋愛行動の段階と恋愛意識　心理学研究，**64**(5)，335-342

松井豊　2000　恋愛段階の再検討　日本社会心理学会　第41回大会発表論文集，92-93

Sternberg, R. J.　1986　“A triangular theory of love,” *Psychological Review*, Vol. 93, No. 2.119-135


## 注

１）この研究は、2017年度立正大学心理学研究所の研究助成のもとで企画されたものの一部である。立正大学心理学研究所の助成に感謝の意を表したい。

**要　約**

インターネット調査で男女関係のデータが収集された。調査参加者は、東京および隣接県の年齢20歳～49歳の男女からのサンプルで518名の男性と606名の女性であった。身近な最も親密な異性を想定してもらい、その関係が友達、片思い相手、恋人、婚約者、結婚相手、不倫相手の６関係についてデータを収集した。

各関係における異性パートナーの相手の魅力と自分の魅力とを測定し、因子分析の結果、美的魅力、地位と富、対人的魅力、社会的魅力の４つの因子を抽出し、これらの因子得点を目的変数として設定し、比較変数としては、本人の性別、相手の年齢の年代、相手との関係の三元配置多変量分散分析を行い、関係ごと、男女別、年代別に相手の魅力ごとに平均値を比較した。分析の結果、男性の相手は、多くの関係で美的魅力と対人的魅力が高い女性の相手であった。女性の相手は、多くの関係で地位と富と社会的魅力の高い相手であった。男女がお互い自分のもっていない魅力を相手に求めているという魅力の相補性が確認された。男女とも結婚関係において、相手の魅力が最も低く、結婚相手というのは自分が相手に望む魅力の多くを諦めて成立していると推定された。

次に関係満足度、関係幸福度について、性別、年代、相手との関係という三元配置多変量分散分析を実行して平均値を比較した結果、関係満足度、関係幸福度とも婚約者が最も高く、次に結婚相手、恋人相手の順であった。不倫関係は結婚関係より関係満足感、関係幸福感とも有意に低かった。今後、魅力の結果と満足度、幸福度の結果の矛盾について引き続き分析がなされる予定である。相手への愛、相手からの愛についても分析が行われ、考察がなされた。

**キーワード**：男女の愛情関係、魅力比較、満足度比較、愛比較